

論 説

中国の周辺外交と北朝鮮という「特殊な周辺国家」: 米朝接近を懸念する中国についての分析

山 崎 周*

はじめに

2013年10月、中国の周辺外交の現状やその目標を討議するため、北京で「周辺外交工作座談会」が開催された。習近平国家主席は、中国を取り巻く東アジアの対外環境が重大な戦略的意義を持つとして、周辺外交の重要性を説いている¹⁾。このように中国は、周辺国との関係の重要性を理解している。

中国が周辺外交を重視している主たる理由は、米国との関係のためである。中国は、米国が自国の周りの国々と連携を図り、それらの諸国を対中包囲のために利用することを警戒しているのである。中国は、米国によるそのような企図を防ぐために、東アジアの周辺国との関係を深めて、米国に付け入る隙を与えないようにする必要があると考えている²⁾。

他方で、米国が中国周辺の全ての国と関係を改善させているわけではない。例えば、北朝鮮は米国との間で正式な国交関係を樹立していない上に、米国からの反対を押しきって核兵器開発を続けており、米朝関係は行き詰っている。

* 青山学院大学国際政治経済研究科修士課程修了 2013年度修士(国際政治学)
amane_yamazaki717@hotmail.com

国際政治経済学会 2014年3月25日受付, 2014年5月29日レフェリーの審査を経て掲載決定。

- 1) 钱彤: “为我国发展争取良好周边环境推动我国发展更多惠及周边国家”, 《人民日报: 国内版》, 2013年10月26日。
- 2) Li Mingjiang, *China's Proactive Engagement in Asia: Economics, Politics, and Interactions* (Singapore: S. Rajaratnam School of International Studies, 2007).

米国が主導する対中包囲網の形成を恐れる中国にとって、米国と安定的な関係を築くことができない北朝鮮は地政学的に肝要な存在であろう。

しかし、冷戦後の米中関係では、食糧支援などの対外援助を用いて、北朝鮮に対する影響力を相手よりも高めようと外交的に争った経緯もある³⁾。後述のように、冷戦後の中国は、米朝関係が自国を横目に進展することを懸念してきた。朝鮮半島における米国との間での角逐に備えて、中国は米朝関係の進展具合を看視しているのである⁴⁾。

本稿は、主に二つのことを論じる。一つは、中国の周辺外交における北朝鮮の位置づけである。中国の対外政策において、北朝鮮との関係は周辺外交から切り離されており、北朝鮮との関係を特別なものとして見なしてきた。米国との関係で不確実性を抱える近年の中国にとって、北朝鮮が占める地政学的な重要度が増してきている。

いま一つの本稿の主張は、北朝鮮との関係においても、中国は周辺外交の目的である米国主導の対中包囲網の形成の阻止を強く意識する必要があるという点である。前述のように、中国は北朝鮮との関係においては周辺外交を適用してこなかった。しかし、北朝鮮は米国との関係を対中牽制の手段としており、中国からすれば、北朝鮮すらも米国側に靡くのではないかというように映る。また、中国は、米国が北朝鮮を抱き込む可能性も憂慮している。本来は、周辺外交の主目的を考慮する必要がないはずの北朝鮮との関係においても、中国は、米国が北朝鮮を抱き込む可能性を計算しなければならないのである。そして、米国との関係を中国に対する外交上のカードとして用いる北朝鮮による戦術は、中国の北朝鮮に対する不信を高める要因になってきた。以上が、本稿の議論の中核となる。

3) Taekyoon Kim, "Strategizing Aid: US-China Food Aid Relations to North Korea in the 1990s," *International Relations of the Asia Pacific*, Vol. 12 (2012), pp. 41-70.

4) Pang Zhongying, *The Six-Party Process, Regional Security Mechanisms, and China-U. S. Cooperation: Toward a Regional Security Mechanism for a New Northeast Asia* (Washington D. C.: The Brookings Institution, 2009), p. 29.

米中両国は、北朝鮮をめぐる諸問題、とりわけ、同国による核開発問題に関して、六者会合などの場で外交的な協力を行ってきた。北朝鮮による核開発問題への中国の積極的な関与は、朝鮮半島における米国の影響力拡大の歯止めには資するだけではない。同問題の解決に向けた過程において、米国との協力を推進することによって、中国は米中関係を強化することもできる⁵⁾。北朝鮮の核開発問題を通じて、米国との関係改善を図りたいという動機が中国にはある。また、日本やロシア、そして当然のことながら韓国も朝鮮半島に大きな利害関心を有する国家であり、米国のみが中国の対北朝鮮政策に影響を及ぼす唯一のアクターというわけではない⁶⁾。これらの側面も重要ではあるが、本稿では、中国の対外政策における米国及び北朝鮮との関係に主眼を置く。

本稿の構成は以下になる。まず第1章で、中国の周辺外交の主目的が、自国を標的とした米国による包囲網の結成を防ぐことであることを示す。第2章では、中国は、冷戦後も北朝鮮との関係を特殊なものとして位置付けてきたため、北朝鮮を周辺外交の対象国にはしていないことを明らかにする。また、最近の米中間での対立関係もあり、中国にとっての北朝鮮の地政学的な価値が上がってきているとも論じる。第3章では、北朝鮮が米国との関係改善を望んでいるだけでなく、米国との関係を対中牽制のための外交カードとして用いていると指摘する。第4章では、米朝が自国の頭越して結託することによって、北朝鮮でさえも米国の対中包囲網の一員と化すのではないかと中国が恐れてきたことを説明する。最後に、本稿の議論のまとめを行う。

1. 中国の周辺外交：米国による対中包囲網の防止

1980年代前半頃から、中国は徐々にアジアでの地域政策を展開し始めていたが、周辺外交を本格化させる契機となったのは1989年6月の天安門事件後の

5) Gong Keyu, "Tension on the Korean Peninsula and Chinese Policy," *International Journal of Korean Unification Studies*, Vol. 18, No. 1 (2009), p. 103.

6) その点に関しては、Gilbert Rozman, *Strategic Thinking about the Korean Nuclear Crisis: Four Parties Caught between North Korea and the United States* (New York: Palgrave Macmillan, 2011), pp. 123-143。

外交的な孤立であった⁷⁾。天安門事件及び冷戦終結後の中国外交の最優先課題の一つは、関係が疎遠な、あるいは正式な国交すら結んでいない周辺国との関係への対応となったのである⁸⁾。冷戦後の中国は、東アジア、中央アジア、南アジアといった地域の諸国、あるいはモンゴル、ロシア等といった国々を自国の「周辺国家(周辺国家)」と位置づけてきた⁹⁾。

また、中国と米国は地理的に隣接しているわけではないが、中国は米国の対アジア戦略こそが自国の周辺の安全保障環境に影響を与える最大の地政学的要素であると認識しており¹⁰⁾、米国は中国にとっての「特殊な周辺国家(特殊周辺国家)」となっている¹¹⁾。

中国が周辺外交を重視する理由は大別すると二つあり、一つは中国の経済発展のために適した対外環境を創出することだが、いま一つは、米国が中国の周辺国を足場として対中包囲網を築くのを防止することである¹²⁾。

冷戦後の中国外交の「大戦略(grand strategy)」の一つは、経済発展を安定的に持続するための最適な周辺環境を整えることである¹³⁾。周辺外交の目的も、そのような「大戦略」と軌を一にする¹⁴⁾。中国の指導部は、外交の主目的を内

- 7) Bin Yu, "China and Its Asian Neighbors: Implications for Sino-U. S. Relations," in Yong Deng and Fei-Ling Wang (eds.), *In the Eyes of the Dragon: China Views the World* (Lanham: Rowman & Littlefield, 1999), pp. 187-190.
- 8) Weixing Hu, "Beijing's New Thinking on Security Strategy," *The Journal of Contemporary China*, No. 3 (1993), p. 60.
- 9) Wang Jisi, *China's Changing Role in Asia* (Washington D. C.: The Atlantic Council of the United States, 2004), p. 6.
- 10) 朱昕昌主编:《中国周边安全环境与安全战略》, 时事出版社, 2002年, 第67页; 张建: "中国周边外交再思考", 《共视网》, 2013年7月19日: <http://www.21ccom.net/plus/view.php?aid=87976> (2013年12月11日アクセス可)。
- 11) 朴键一:《中国周边安全环境与朝鲜半岛问题》, 中央民族大学出版社, 2013年, 第11页。
- 12) Suisheng Zhao, "The Making of China's Periphery Policy," in Suisheng Zhao (ed.), *Chinese Foreign Policy: Pragmatism and Strategic Behavior* (New York: M. E. Sharpe, 2004), pp. 256-275.
- 13) Avery Goldstein, *Rising to the Challenge: China's Grand Strategy and International Security* (Stanford: Stanford University Press, 2005); 叶自成:《中国大战略: 中国成为世界大国的主要问题及战略选择》, 中国社会科学出版社, 2003年。
- 14) 中国の周辺外交の目的が、経済の現代化のために安定した周辺環境を整えることにあるという点に関しては、並综华: "学习邓小平外交思想, 做好周边外交工作", 王泰平主编:《邓小平外交思想研究论文集》, 世界知识出版社, 1996年, 第212-220页。

政、特に経済発展に資するためのものであると考えている¹⁵⁾。

だが、中国が安定的な対外環境の構築と国内の経済発展という目標を達成する上では、米国との関係が極めて重大な意義を持つ¹⁶⁾。中国にとって、米国は最大の経済的なパートナーであると同時に、最大の脅威でもあるという矛盾を孕んだ存在である¹⁷⁾。

中国の周辺外交における重要な目標は、自国を対象とした地域的な連合 (coalition)、特に米国が主体となった対中包囲網が形成される事態を防ぐというものである¹⁸⁾。冷戦後の中国の米国との関係における安全保障上の最大の関心事は、米国といかに協力をするかではなく、米国による中国の孤立化や包囲網の形成、封じ込めをいかに回避するかなのである¹⁹⁾。

中国のある研究者たちは、米国との関係が悪化した時に備えて、中国は周辺諸国との関係を安定的に維持させる戦略をとっていると主張している。中国は、アジアの周辺国を他の大国から自国に加えられる圧力を緩和するための盾と見

15) 刘建飞：“理性考评中国外交”，《学习时报》，2012年12月17日。

16) David M. Lampton, “Small Mercies: China and America after 9/11,” *The National Interest*, Vol. 66 (2001/2002), p. 108.

17) 王缉思：“东西南北，中国居“中”：一种战略大棋局思考”，王缉思主编：《中国国际战略评论 2013》，世界知识出版社，2013年，第26页；Wang Yizhou, “China’s New Foreign Policy: Transformations and Challenges Reflected in Changing Discourse,” *The Asan Forum* (2014): <http://www.theasanforum.org/chinas-new-foreign-policy-transformations-and-challenges-reflected-in-changing-discourse/> (2014年7月14日アクセス可)。

18) Rosemary Foot, “China’s Policies toward the Asia-Pacific Region: Changing Perceptions of Self and Changing Other’s Perceptions of China?,” in Hsin-Huang, Michael Hsiao, and Cheng-Yi Lin (eds.), *Rise of China: Beijing’s Strategies and Implications for the Asia-Pacific* (London and New York: Routledge, 2009), p. 135; John W. Garver and Fei-Ling Wang, “China’s Anti-encirclement Struggle,” *Asian Security*, Vol. 6, No. 3 (2010), p. 238. 中国の周辺外交が、アジアにおける米国主導の対中包囲網の構築を防ぐという目的を持つことについては、やや古いが、Li, *China’s Proactive Engagement in Asia: Economics, Politics, and Interactions* が中国国内における議論をまとめている。

19) Zhu Feng, “China’s Rise Will Be Peaceful: How Unipolarity Matters,” in Robert S. Ross and Zhu Feng (eds.), *China’s Ascent: Power, Security, and the Future of International Politics* (Ithaca: Cornell University Press, 2008), p. 38.

なしている。そのため、中国の対アジア地域政策における重要な目標の一つは、周辺国との関係を良好に保って、他の大国、とりわけ米国による対中封じ込め連合の形成を防止することであると述べている²⁰⁾。

中国の政策決定者たちは、公の場で、周辺外交の目的が米国を中心とした対中包囲網の形成を阻止することであると公言しない。なぜなら、それを公言すれば、中国は自国をアジアから排除しようとしていると米国側が解釈するかもしれないからであり、中国は米国に気づかれないようにして、アジアにおける米国の影響力を低下させようとしてきた²¹⁾。冷戦後の中国の周辺外交には、米国が自国に対する包囲網を東アジアで築くことを阻止するために、米国の影響力に対抗するという一貫した方針が含まれてきたのである。

対外的に明言することはなくとも、中国の指導部が米国による対中包囲網の形成を恐れているのは事実であろう。胡錦濤元国家主席は、「(アメリカは)はアジア・太平洋地域に軍の展開を強化し、日米軍事同盟を強化し、インドとの戦略的協力関係を強化し、ベトナムとの関係を改善し、パキスタンを抱き込み、アフガニスタンに親米政権を樹立し、台湾への武器売却を増やした。さらにかねは前哨基地を拡大し、東、南、西の三方面からわが国に圧力をかけている。このことはわが国の地政学的環境に大きな変化をもたらしている²²⁾」と述べている。

羅照輝中国外交部アジア司長は、2013年12月の周辺外交に関するインタビューの中で、同年10月の「周辺外交工作座談会」に際して考えたことの一つとして、米国は過去10年ほどテロとの闘いに没頭してきたが、現在は戦略の重心をアジア太平洋に移したために、同地域の情勢が新たな変動期に入ったとい

20) Zhang Yunling and Tang Shiping, "China's Regional Strategy," in David Shambaugh (ed.), *Power Shift: China and Asia's New Dynamics* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2005), pp. 50–51.

21) Evan S. Medeiros, *China's International Behavior: Activism, Opportunism, and Diversification* (Santa Monica: RAND, 2009), pp. 53–59.

22) アンドリュウ・ネイサン／ブルース・ギリ(山田耕介訳)『中国権力者たちの身上調査：秘密文書が暴いた処世術・人脈・将来性』(阪急コミュニケーションズ, 2004年), 255項。

う点を挙げている²³⁾。羅は、米国が対中包囲網を作って自国を封じ込めようとしているとは言明していない。しかし、米国のアジア太平洋でのプレゼンスの向上が、中国の周辺環境に重大な変化をもたらしていると考えていることは確かである。

中国は、バラク・オバマ政権下の米国が、外交及び安全保障政策の軸を中東からアジアへと移行させるための一連の対外政策を非常に警戒している。その理由は、米国が中国を封じるために、東アジアでのプレゼンスを高めようとしていると考えているからである²⁴⁾。羅の発言は、そのような中国側の認識を顕在化させたものであろう。

最近では、周辺外交のような対アジア地域政策を米中関係の文脈から分離して展開する必要性も説かれている²⁵⁾。しかし、中国は周辺国との関係を自国と米国との間での競争においてどのような意義を有しているのかという観点から見えており、中国の対アジア政策は米国との関係によって左右されやすい。中国は、ほとんどの国との関係を米中関係の観点から捉える傾向にあり、中国の対外政策においては、米国以外の国との関係は副次的な位置づけにならざるを得ないであろう²⁶⁾。そのため、今後も、中国が周辺外交を米国との関係という視点から分離させて実施することは想像し難い。

以上のように、中国は、米国が対中包囲網を作ろうとする動きを警戒してき

23) “中国周辺外交新征程：外交部亚洲司司长罗照辉接受“外交·大家谈”微访谈”，《中华人民共和国外交部》，2013年12月26日：http://www.fmprc.gov.cn/mfa_chn/wjb_602314/zjzg_602420/t1112423.shtml（2014年1月14日アクセス可）。

24) オバマ政権の対アジア政策に対する中国側の見方をまとめたものとして、Michael D. Swaine, “Chinese Leadership and Elite Responses to the U.S. Pacific Pivot,” *China Leadership Monitor*, Vol. 38 (2012); Lanxin Xiang, “China and the ‘Pivot,’” *Survival*, Vol. 54, Issue 5 (2012), pp. 113–128.

25) Lanxin Xiang, “China Is Waking up to the Benefits of Good Diplomacy in Asia,” *South China Morning Post* (November 5, 2013): <http://www.scmp.com/comment/insight-opinion/article/1348345/china-waking-benefits-good-diplomacy-asia>（2014年1月22日アクセス可）。

26) Michael Auslin, “For China, It’s All about America,” *The Diplomat* (July 6, 2012): <http://thediplomat.com/china-power/for-china-its-all-about-america/>（2012年8月9日アクセス可）。

た。中国としては、自国の周辺に位置し、米国との外交関係において摩擦を抱えている国家を重点的に取り込んでいく必要がある。そして、中国の周辺地域において、そのような国家の候補としてまず挙げられるのが北朝鮮である。

2. 中国の周辺外交と北朝鮮：中朝関係の特殊性

2009年にオバマ政権が発足して以降、米国は対東アジア政策に重点を置く姿勢を打ち出し、ミャンマーなどとの関係改善にも乗り出すなど、東アジアでの外交的なプレゼンスを高めようとしている。だが、米国が全ての東アジアの国々との関係を改善するのに成功してきたわけではない。中でも、国際社会からの反発を無視して核兵器開発を継続し、未だに米国や日本と正式な外交関係を持っていない北朝鮮はその好例である。米朝関係は、主として北朝鮮の核兵器開発問題のために停滞している。

米国による対中包囲網の構築を防ごうとしてきた中国からすれば、米国との間で正式な外交関係を持たず、社会主義体制を敷いている北朝鮮は重要な周辺国である。2003年、当時の王毅中国外交部副部長は、中国と周辺諸国の関係に関する論文の中で、北朝鮮などの伝統的なつながりを持つ周辺諸国との関係を堅固にし、それらの国々の発展を支援していくことを重視すると記している²⁷⁾。

だが、中国国内での周辺外交をめぐる議論の中で、北朝鮮との二国間関係に言及されることはほとんどないと思われる。特に、他の周辺諸国との二国間関係に関する言説の数と比較すると、尚更そのような印象が強い。北朝鮮の核開発問題が中国の周辺環境に重大な影響を及ぼしうる要素として挙げられることは多いが、周辺外交に関する議論の中で北朝鮮との関係に言及する言説はほとんど見当たらない。

例えば、2008年に中国で出版された『中国と周辺国家：新しい形のパート

27) 王毅：“中国与周边国家外交关系综述：与邻为善以邻为伴”，《中国新闻网》，2003年2月21日：<http://www.chinanews.com/n/2003-02-21/26/274931.html>（2014年1月22日アクセス可）。

ナーシップ関係の構築』という文献では²⁸⁾、中国とその周辺諸国との関係が幅広く分析されている。同書で扱われる周辺国は米国やロシアといった大国から、東南アジア、中央アジア、南アジア地域に属する各国であり、日本や韓国、モンゴルといった北東アジアの域内諸国との関係も分析対象となっている。それにもかかわらず、北朝鮮との関係に関する章は設けられていない。

第1章で述べたように、中国の周辺外交は米国との関係を念頭に置いて行われている。だが、中国の対北朝鮮政策は、中国の米国に対する認識と同程度に、中国の北朝鮮に対する見方によって規定されているであろう²⁹⁾。中国は、北朝鮮との関係を他の周辺国との関係とは区別しており、中朝関係においては、中国と他の周辺諸国との関係にはない独自のロジックが働いていると考えられる。

歴史的に鑑みて、朝鮮半島は中国の安全保障と密接にかかわる地理的な要所であり、同地の平和や安定は中国にとって死活的な意味合いを持っている³⁰⁾。中国からすると、朝鮮半島はユーラシア大陸に他の大国が進出するために使われるかもしれない橋頭堡であり、弱肉強食的なパワー・ポリティクスの状況下にある諸大国が、自らの影響力の拡大のために競合する空間でもある³¹⁾。

冷戦期の中国は、米国が朝鮮半島を対中封じ込めのための足場として確保しようとするだけでなく、ソ連も北朝鮮を自陣に取り込んで対中包囲網を構築しようとする想定していたため、北朝鮮との関係を戦略的に重要視していた³²⁾。

28) 张蕴岭主编：《中国与周边国家：构建新型伙伴关系》，社会科学文献出版社，2008年。

29) Andrew Scobell, “China Bandwagons with North Korea,” *e-International Relations* (May 2, 2013): <http://www.e-ir.info/2013/05/02/china-bandwagons-with-north-korea/> (2014年1月4日アクセス可)。

30) Zhang Xiaoming, “The Korean Peninsula and China’s National Security: Past, Present, and Future,” *Asian Perspective*, Vol. 22, No. 3 (1998), pp. 259–272; 陈峰君, 王传剑：《亚太大国与朝鲜半岛》，北京大学出版社，2002年，第5章；陆俊元, 王恩涌：“战后世界政治格局与中国的地缘政治”，王恩勇主编：《中国政治地理》，科学出版社，2004年，第200–201页。

31) 刘宏焯主编：《中国睦邻史：中国与周边国家关系》，世界知识出版社，2001年，第110页。

32) 李成日『中国の朝鮮半島政策：独立自主外交と中韓国交正常化』（慶應義塾大学出版会，2010年），214項；刘金质, 藩京初, 藩荣英, 李锡遇编：《中国与朝鲜半岛国家关系文件资料汇编（1991–2006）上》，世界知识出版社，2006年，第28页。

国際的に孤立した時でも、冷戦期の中国は北朝鮮と安定した関係を維持することができた。中国が東側陣営内などで外交的な孤立を深めた時期には、同国にとっての北朝鮮の存在価値が相対的に上がるという構造が存在していたのである³³⁾。そして、そのような構造は、冷戦後の現在に至っても不変であると思われる。

冷戦後の中国は、米国が朝鮮半島を橋頭保として自国に脅威をもたらすことを懸念している³⁴⁾。中国は韓国との関係を重視しているが、米韓同盟の存在や北朝鮮との関係への配慮などもあって、韓国との関係には限界があるだろう³⁵⁾。そうであれば、北朝鮮との関係が中国の対朝鮮半島政策の中核となる。

『環球時報』の英語版である『グローバル・タイムズ』のある社説は、中国にとっての北朝鮮の地政学的な価値について言及しているが³⁶⁾、これは中国の考えをかなりの程度反映していよう。

それによれば、北朝鮮による挑発的な行動が原因となって、中国国内では北朝鮮を見捨てるべきであるという意見が出てきているが、中国政府はそのような意見に従わないであろうとする。なぜならば、世界で最も地政学的に複雑な状況下にある北東アジアにおいて、中国は北朝鮮との関係を自国の利益という観点からだけではなく、より包括的な観点から捉えなければならないからである。中朝間には利益の不一致もあるが、日韓が米国のアジア太平洋への「ピヴォット」政策を支えている以上、北朝鮮は中国にとっての盾となっており、北朝鮮の中国に対する姿勢は北東アジアの戦略的な状況に影響を及ぼしうる。そして、中国の対外関係の中で最も安定しているのは北朝鮮との関係であると、この社説は主張している。

33) その点については、Chae-Jin Lee, *China and Korea: Dynamic Relations* (Stanford: Hoover Press, 1996), pp. 70–89。

34) Xia Liping, “The Korean Factor in China’s Policy toward East Asia and the United States,” *American Foreign Policy Interests*, No. 27 (2005), p. 254.

35) 李永春：“试论中韩关系中的朝鲜因素和美国因素”，李向阳主编：《亚太蓝皮书：亚太地区发展报告 2013》，社会科学文献出版社，2013年，第204–215页。

36) “Geopolitics Makes Abandoning NK Naïve,” *The Global Times* (April 12, 2013): <http://www.globaltimes.cn/content/774425.shtml#.UmPwf9-CjIV> (2013年10月11日アクセス可)。

近年の米中間での相互不信の増大もあって、中国にとって北朝鮮の戦略的な価値は依然として高く、むしろ米中関係の悪化と共に高まってきている³⁷⁾。米国が自国の周辺国を抱き込もうとしているという危機感を持つ中国にとって、冷戦期と同様に、安定した外交関係を保てる北朝鮮は貴重な存在であろう。中国が周辺外交において、北朝鮮との関係を他の周辺国との関係から差別化し、北朝鮮との関係を周辺外交の枠組みから除外する背景にはこのようなロジックがあり、中国は、北朝鮮を米国と同じように「特殊な周辺国家」として扱ってきたとも言える。

例えば、朝鮮半島情勢の専門家である朴鍵一は、中国はほとんどの周辺国との間で「パートナーシップ関係（伙伴关系）」を築いている一方で、北朝鮮とは例外的に「伝統的な友好関係（传统友好关系）」にあるとする³⁸⁾。『環球時報』紙が2010年に中国で実施した世論調査によれば³⁹⁾、33.2%の人が中朝関係は普通の国家間関係であるとしながらも、60.4%の人は特殊な友好関係であると回答している。中国にとって、北朝鮮との外交関係は未だに特殊なものであり⁴⁰⁾、

37) 呉心伯（山根健至訳）「中国の朝鮮半島政策を解題する」中達啓生編『東アジア共同体という幻想』（ナカニシヤ出版、2006年）、147項；小此木政夫「金正恩体制の形成：体制変化と政策継続」小此木政夫／文正仁／西野純也編著『転換期の東アジアと北朝鮮問題』（慶應大学出版会、2012年）、8項；平岩俊司『北朝鮮：変貌を続ける独裁国家』（中央公論新社、2013年）、190項；Jaeho Hwang, “Measuring China’s Influence over North Korea,” *Issues & Studies*, Vol. 42, No. 2 (2006), p. 211; Yun Sun, “The Logic of China’s North Korea Policy,” *PacNet*, No. 39 (Honolulu: Pacific Forum CSIS, 2012): <http://csis.org/publication/pacnet-39-logic-chinas-north-korea-policy> (2013年5月12日アクセス可); Bonnie S. Glaser and Brittany Billingsley, et al., *Reordering Chinese Priorities on the Korean Peninsula* (Washington D. C.: Center for Strategic & International Studies, 2012), p. 3.

38) 朴：《中国周边安全环境与朝鲜半岛问题》，第245页。

39) “环球舆情：朝韩冲突6成受访者对朝态度中立”，《环球网》，2010年11月29日：<http://mil.huanqiu.com/china/2010-11/1299649.html> (2013年2月12日アクセス可)。

40) 田一枫：“寻求中朝间正常国家关系”，《大公报》，2013年2月25日：<http://news.takungpao.com/opinion/takung/2013-02/1456270.html> (2014年6月19日アクセス可)；郑浩：“中朝关系特殊而敏感有五方面原因”，《凤凰网》，2013年7月29日：http://news.ifeng.com/world/detail_2013_07/29/28017962_0.shtml (2014年7月1日アクセス可)。

中国外交部のある外交官は、北朝鮮との関係は特殊で複雑であると発言している⁴¹⁾。

中国が北朝鮮を自国にとって欠かせない戦略的な要害であると見なしていることを明白に示した事例は、2010年の朝鮮半島における中国の外交的な言動である。

2010年の朝鮮半島は、3月の韓国の哨戒艦天安が北朝鮮の攻撃によって沈没したとされる事件や、11月の北朝鮮が韓国の延坪島を砲撃した事件などによって緊迫化していた。この二つの事件以降、中国の専門家の多くは、自国を封じ込める目的のため、米国の朝鮮半島の緊張状態を口実として東アジアでのプレゼンスを向上させようとしていると考えて、米国の動きを一層警戒するようになる⁴²⁾。

更に、朝鮮半島の緊迫化のために行われた日米や米韓のそれぞれの同盟関係の強化、及び日米韓の三カ国による協力関係の推進は、北朝鮮にとってと同様、中国にも脅威と映るものであった。2010年夏の黄海での米韓合同軍事演習に対する中国の激しい反発は、米国の北朝鮮問題を口実として、自国を封じ込めるための手段の強化を図っているという警戒心を露呈したものであった⁴³⁾。

延坪島砲撃事件の直後に中国の七つの都市で行われた『環球時報』紙による世論調査では⁴⁴⁾、北朝鮮が中国にとってどのような意味を持っているかという設問に対して、「戦略的障壁(戦略屏障)」や「同盟国(盟友)」といった回答が

41) 黄忠清：“中朝关系缘何更趋复杂？”，《南华早报》，2013年8月1日：<http://www.nanzao.com/sc/features/10256/zhong-zhao-guan-xi-yuan-he-geng-qu-fu-za> (2014年7月16日アクセス可)。

42) International Crisis Group, *China and Inter-Korean Clashes in the Yellow Sea* (Brussels: International Crisis Group, 2011), p. 5; 吴心伯：“美国的亚太战略”，周方银主编：《大国的亚太战略》，社会科学文献出版社，2013年，第29-30页。

43) Drew Thompson and Natalie Matthews, “Six-Party Talks and China’s Goldilocks Strategy: Getting North Korea Just Right,” *Joint U. S.-Korea Academic Studies*, Vol. 11 (Washington D. C.: Korea Economic Institute of America, 2011), p. 182. 中国が黄海での米韓の軍事演習をどのように見ていたかに関しては、例えば、Yang Yi, “Navigating Stormy Waters: The Sino-American Security Dilemma at Sea,” *China Security*, Vol. 6, No. 3 (2010), pp. 3-9; 张召忠：《朝鲜半岛风云》，北京联合出版公司，2012年。

44) “环球舆情：朝韩冲突 6 成受访者对朝态度中立”，《环球网》。

中国の周辺外交と北朝鮮という「特殊な周辺国家」

それぞれ 44.7% と 43.2% を集めている。更に、朝鮮半島に緊張状態を作り出す主要素となっている国家はどこかという設問に対しては、55.6% の人が米国であり、9.0% の人のみが北朝鮮であると回答した。

2010 年から翌年にかけて朝鮮半島が緊迫化していた時期に、金正日国防委員会委員長が四回にわたって訪中するなど、北朝鮮側も中国との関係強化を図った結果、「中国が地政学的に北朝鮮の擁護者として再登場した⁴⁵⁾」のであった。この時期の中朝関係の進展は、米国が対中封じ込めを図っているという中国側の危機感が強まったことが一因となって促されたと言える。

北朝鮮は未だに米国との国交正常化を果たしていない。米朝間には、北朝鮮による核開発問題などの解決困難な外交課題がある。中国から見れば、北朝鮮は自国の周辺の国家の中で、米国の対中包囲網に組み込まれる可能性が最も少ない国家であろう。その上、中国は外交的にも、経済的にも北朝鮮との間で特殊な関係を維持している。米国が東アジアの域内諸国との関係を深めているため、周辺環境が悪化しつつあるという認識を持つ中国は、米国と対立関係にある北朝鮮が自国にとっての緩衝地帯となっていると考えているであろう。

既述のように、中国は北朝鮮との関係を周辺外交の中には位置づけていない。だが、国交樹立ですらままならない米朝関係とは対照的に、北朝鮮との特殊な関係を保持しているという意味では、中国と北朝鮮との関係は、中国外交の成果を体現している一例であると言えよう。

3. 米国に接近しようとする北朝鮮：中国外交への含意

米国による対中包囲網の形成を阻止するという中国の目標は、周辺諸国との関係の中でも、北朝鮮との関係において最も達成されているように思われる。中国にとって、北朝鮮は米国との間での緩衝地帯としての役割を引き続き担っているであろう。

45) 小此木「金正恩体制の形成：体制変化と政策継続」小此木／文／西野編『慶應義塾大学東アジア研究所・現代韓国研究シリーズ：転換期の東アジアと北朝鮮問題』、3項。

その一方で、北朝鮮が外交的に必ずしも自国に一辺倒ではないということを中国は自覚している。朱鋒は、北朝鮮は、中国が自国に過度な圧力を加えれば米国に接近すると仄めかしており、北朝鮮はそのようなカードを用いて中国に対処しているとしている⁴⁶⁾。また、朱は、もし中国が北朝鮮に非核化を強要すれば、北朝鮮が反中のな国家になる恐れがあり、ほとんどの中国の政策決定者はそのような事態に陥るのをひどく嫌っていると論じている⁴⁷⁾。

中国は、米国が朝鮮半島においてどのように振る舞うかを注視しなくてはならない。中国からすれば、北朝鮮が米国のような自国と敵対関係にある国家とあまりにも緊密な関係を築くことは望ましくないだろう⁴⁸⁾。また、中朝関係が悪化すれば、北朝鮮自体が自国の安全保障上の脅威にもなりかねないと中国は憂慮している⁴⁹⁾。

中国は、北朝鮮が米国との関係を過度に緊密化させる事態を望んではいないが、それとは裏腹に、北朝鮮のエリートの間には幅広く見受けられる米国に対する期待感があるという。それは、北朝鮮が抱く米国との間での「戦略的パートナーシップという幻想 (the strategic partnership fantasy)⁵⁰⁾」である。

北朝鮮は、核兵器やその運搬手段であるミサイルの開発、韓国に対する限定的な武力行使等、表向きには米国を挑発する政策を取り、米国の言動に対しても批判的である。その一方、後述のように、北朝鮮政府の高官はしばしば、米国が中国を牽制するのを支援するために、米国と連携することも厭わないといった考えを表明する。北朝鮮のエリートは、米国との間で対中牽制を目的とした戦略的パートナーシップを結ぶことが可能であると期待しているのである。中

46) Zhu Feng, "Shifting Tides: China and North Korea," *China Security*, Issue 4 (2006), p. 40.

47) Ibid, p. 43.

48) You Ji, "China and North Korea: A Fragile Relationship of Strategic Convenience," *Journal of Contemporary China*, Vol. 10, No. 28 (2001), pp. 392-393.

49) Andrew Scobell, *China and North Korea: From Comrades-in Arms to Allies at Arm's Length* (Carlisle: Strategic Studies Institute, 2004), p. 16.

50) Andrei Lankov, *The Real North Korea: Life and Politics in the Failed Stalinist Utopia* (Oxford: Oxford University Press, 2013), p. 184.

国では、そのような言説によって誤った期待感を抱いた米国が、北朝鮮を戦略的に重視しているという見解がある⁵¹⁾。

1997年に韓国へ亡命した黄長燁元朝鮮労働党書記は、北朝鮮の外交の基本方針は、朝鮮半島周囲の四大国（日本、ロシア、中国、米国）の間の矛盾を突いて漁夫の利を得ることであるとしている⁵²⁾。米中間での対立が激化すれば、北朝鮮は、時には米国、時には中国を支持することによって互いに争う両大国の間で上手く立ち振る舞い、自己の外交的な利益を増大させることが可能となる⁵³⁾。

北朝鮮は、1990年代半ば頃から米中間での覇権争いの兆しを読み取り、両国の利害関係につけ込んで、外交的な利益を最大化しようとしてきた。米中間での争いは、大国同士の競争という北朝鮮にとって望ましい環境を生み出し、自国の地政学的な状況を熟知している北朝鮮の政策決定者たちに外交的な機会をもたらしたのである⁵⁴⁾。

1995年に北朝鮮のある高官は、平壤を訪れた米国のシンクタンクである外交問題評議会のメンバーに対して、「もし中国の増大するパワーにバランスを取る必要があるのであれば、（米国は）我々との関係を樹立すべきである」と発言している⁵⁵⁾。同年には、米国の国務次官補と同ランクにある北朝鮮政府の高官がセリグ・S・ハリソンに対して、中ロといった大国の自国に対する影響力を相殺するために、北朝鮮は米国と親密な関係を築きたいと述べたという⁵⁶⁾。

2007年3月には、北朝鮮の金桂寛外務次官がニューヨークを訪問してヘンリー・キッシンジャー元国務長官と会談した際、「米国が中国を牽制しようとす

51) 孙茹：《朝核问题：地区合作进程研究》，时事出版社，2009年，第26-27页。

52) 黄長燁（萩原遼訳）『黄長燁回顧録：金正日への宣戦布告』（文藝春秋，1999年），381頁。

53) Liu Ming, “Changes and Continuities in Pyongyang’s China Policy,” in Kyung-Ae Park and Scott Snyder (eds.), *North Korea in Transition: Politics, Economy, and Society* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, INC, 2013), p. 233.

54) キム・ヨンス「外交：威信重視のスタイル」北朝鮮研究学会編／石坂浩一監訳『北朝鮮は、いま』（岩波書店，2007年），59-60頁。

55) Nayan Chanda, “Lesser Evil: After Chinese Brush-off North Korea Courts U. S.,” *Far Eastern Economic Review*, Vol. 158, No. 51 (1995), p. 17.

56) Selig S. Harrison, *Korean Endgame: A Strategy for Reunification and U. S. Disengagement* (Princeton: Princeton University Press, 2002), p. 325.

るなら、我が国を（米国の側に）引きつけておくべき⁵⁷⁾」と発言している。

米国の北朝鮮担当特別代表を務めたステファン・ボズワースは、同代表への就任直前の2009年2月初旬、自国の元政府当局者や研究者を伴って訪朝する。ボズワースが金桂寛と面会した際、金は、朝鮮半島の非核化は自国にとっての最終的な目標であるとし、北朝鮮は米国と友好関係を結ぶことを希望しており、強大な隣国である中国のパワーに対して釣り合いをとれるように、米国と戦略的パートナーシップ関係を築きたいと強調した⁵⁸⁾。

スタンフォード大学国際安全保障協力センターの薛理泰によれば、2009年8月に米国のビル・クリントン元大統領が訪朝した際、金正日はクリントンに向かって、米国が自国に対する制裁措置を緩和すれば、北朝鮮は米国が中国に対抗するための最も堅固な橋頭保になることができると伝えたという⁵⁹⁾。

そのクリントン元大統領の訪朝に同伴し、米國務省で朝鮮半島に関わる実務に携わった経歴を有するデーヴィッド・ストロープは、北朝鮮は長年にわたって、自国と米国との間での親密な関係は北東アジアでのバランス・オブ・パワーの保持に資するものであり、とりわけ中国に対抗する上で有用であると主張してきたと述べている⁶⁰⁾。

北朝鮮の六者会合の首席代表を務める李容浩外務次官も参加した2012年3月にニューヨークで開催されたセミナーでは、北朝鮮側の出席者が、米国が自国に核の傘を提供すれば、北朝鮮は核を放棄する準備があり、米国との同盟締結

57) 「核の脅威 拡散防げるか (3) 「保有継続」したたか戦略」『読売新聞』(2007年11月13日、朝刊)。

58) Mike Chinoy, *Meltdown: The Inside Story off the North Korean Nuclear Crisis* (New York: St. Martin's Griffin, 2009), p. 375.

59) 薛理泰: “朝鮮核試験, 東北辺陲殆无宁日”, 《中国评论新闻网》, 2013年2月12日: <http://mcn.zhgnl.com/crn-webapp/mag/docDetail.jsp?coluid=28&docid=102437105&page=2> (2013年11月10日アクセス可)。

60) Kim Hyun, “U.S. Has No Intention to Build Close Ties with N. Korea: Ex-Official,” *Yonhap News Agency* (September 2, 2009): <http://english.yonhapnews.co.kr/northkorea/2009/09/02/18/0401000000AEN20090902008600315F.HTML> (2013年8月18日アクセス可)。

も検討すると発言している⁶¹⁾。北朝鮮側の出席者が米国に提案した同盟の構想は、中国に対する同盟というニュアンスを含んでいよう。

北朝鮮の対外的な最優先課題は、米国の自国に対する敵対視政策を放棄させて対米関係を改善することであり、北朝鮮としては、米国以外の国との関係はその目標を達成するための手段であろう⁶²⁾。北朝鮮は、中国が自国との関係よりも米国との関係を最優先にし、中国に見捨てられることもありうると考えていることもあって、米国との関係改善を望んでいる⁶³⁾。

中国は、北朝鮮との関係を安定的に保って、北朝鮮が米国側に接近したり、あるいは米国が対中牽制を目的として北朝鮮との関係を進展させるという事態を防ごうとしてきた。北朝鮮は周辺外交の対象国ではないが、中国は北朝鮮との関係においては、周辺外交の目標を達成してきたと評価できよう。しかし、上記のような北朝鮮の言動からすれば、中国は、北朝鮮でさえも米国側につくかもしれないと憂慮せざるを得ない。

中国の対北朝鮮政策は、米国と戦略的パートナーシップを結んで中国に対する政治的及び経済的な依存を減らそうという北朝鮮側の思惑によって、複雑で困難なものとなっているのである⁶⁴⁾。

4. 米朝結託を懸念する中国：北朝鮮の「第二のヴェトナム」化

冷戦期のヴェトナムの二度にわたるインドシナ戦争に対して多大な支援をし

61) Chung-In Moon, "Opportunities and Obstacles: Revelations from a Dialogue with North Korea," *Global Asia* (March 19, 2012): <http://www.globalasia.org/printphp?c=e481> (2012年6月12日アクセス可)。

62) 「朝鮮半島：急速に進む北朝鮮の体制継承と再編される韓国の安全保障政策」防衛省防衛研究所編『東アジア戦略概観2012』（ジャパントイムズ、2012年）、59項。中国でも、北朝鮮が対外政策において最重視するのは米国との関係であって、日韓との関係は対米関係に従属するものであるという見解がある（方秀玉：“朝鮮核問題上中美两国关系互动”，《国际问题论坛》，2005年夏季号（总第39期），2005年，第55页）。

63) International Crisis Group, *China and Inter-Korean Clashes in the Yellow Sea*, p. 17.

64) Scott Snyder, *China's Rise and the Two Koreas: Politics, Economics, Security* (Boulder and London: Lynne Rienner Publishers, Inc., 2009), p. 202.

ていたにもかかわらず、同国が後にソ連側に寝返って自国を裏切ったという歴史的な記憶が中国にはあるが、そのような経験もあって、中国の外交や軍事の専門家の間では、ヴェトナムと同様、北朝鮮が自国を裏切るかもしれないという危惧の念が流布しているという⁶⁵⁾。中国は、北朝鮮が「第二のヴェトナム（第二越南）」となるかもしれないと不安視しているのである。

中国の人権問題の解決を目指す NGO である「中国の人権」によれば、中国人民解放軍のある高級将校が、「我々は北朝鮮を道具としており、北朝鮮も我々を道具としているが、いつの日か米国が北朝鮮との二国間会談に同意すれば、北朝鮮がいつでも中国を裏切れるようになって、（北朝鮮が）米国の手先になり、第二のヴェトナムと化す」と述べたという⁶⁶⁾。

中国共産党中央党校の国際戦略研究所の教授を務め、中国政府の対北朝鮮政策のブレーンと目されている張璉瑰は、北朝鮮がかつてのヴェトナムのように中国を裏切るような行動をとって、核兵器を中国に向けてくるかもしれないと主張している⁶⁷⁾。

2013年2月に北朝鮮が三回目の核実験を断行すると、中国では北朝鮮が「第二のヴェトナム」になりうるという論説がいくつか出され、米国に本拠を置く中国語のニュース配信サイトである『多维新聞』は、「中国は北朝鮮が「第二のヴェトナム」になるのを憂える⁶⁸⁾」という記事の中で中国の有識者たちの意見を紹介している。中国には、北朝鮮が「第二のヴェトナム」となるかもしれないという懸念を表明する専門家が少なくないのである⁶⁹⁾。

65) You, "China and North Korea: A Fragile Relationship of Strategic Convenience," *Journal of Contemporary China*, p. 391.

66) 曹枚：“世界视角：朝鲜核爆，中国比美国急”，《华夏电子报》，第162期，2006年10月19日：<http://www.huaxiabao.org/article.asp?IssueId=162&ArtNb=6>（2013年8月9日アクセス可）。

67) Zhang Liangui, "Coping with a Nuclear North Korea," *China Security*, Issue 4 (2006), pp. 12-13.

68) “中国忧朝鲜成为“越南第二””，《多维新闻》，2013年2月18日：<http://global.dwnews.com/news/2013-02-18/59133049.html>（2013年8月6日アクセス可）。

69) 例えば，Hao Yufan, "China's Korea Policy in the Making," in Gilbert Rozman (ed.), *China's Foreign Policy: Who Makes It, and How Is It Made?* (New York: Palgrave Macmillan, 2013), pp. 280-281; 薛理泰：“朝鲜核导弹对中国的威胁”，《凤凰网》，

中国国内には、中朝関係が悪化すれば北朝鮮が米国側に靡いたり、米朝が自国の関与しないところで密かに外交交渉をするかもしれないという危惧の念もある。呂超は、そのようなことが実際に起きる可能性は低いとしつつも、米朝が接近すれば、北朝鮮が米国側に靡いていくということを憂慮する専門家が中国には存在するとしている⁷⁰⁾。

2013年2月に北朝鮮が三回目の核実験を行ってから間もない時期、中国共産党中央党校が発行する機関誌『学習時報』の副編集長であった鄧聿文が中朝関係に関する論説を『フィナンシャル・タイムズ』に寄稿した⁷¹⁾。鄧は、もし北朝鮮が核兵器を保有することになれば、それをういて中国を脅迫する可能性があるのみならず、米国が北朝鮮に手を差し伸べれば、北朝鮮が米国側に与するようになり、北朝鮮が米国の対中封じ込め政策における最も強力な要塞になりうるとも述べている。

同年5月、鄧は韓国の新聞『中央日報』によるインタビュー⁷²⁾に応じている。その中で鄧は、中朝関係が構造的に互いを疑い合う状態にあるとする。そして、「北朝鮮は中国が決定的な瞬間に米国と妥協し、北朝鮮を捨てるとみている。一方、中国は北朝鮮が政権の生存のために中国を裏切り、米国を選ぶと考える」と述べ、中朝間での相互不信は米中間や日中間でのそれよりも深いとしている。

張璉瑰は、北朝鮮の核開発問題での中国にとっての最悪のシナリオは、米朝間での裏取引による同問題の解決であり、両国による交渉次第では北朝鮮の非核化が危ぶまれるのに加えて、北朝鮮が中国の友好国ではなくなるかもしれな

2013年2月16日：http://news.ifeng.com/opinion/zhuannlan/xuelitai/detail_2013_02/16/22164116_0.shtml；趙楚：“朝鮮核爆标志中国朝核政策失败”，《华尔街日报》，2013年2月13日：<http://cn.wsj.com/gb/20130213/ZHC092101.asp>（2014年9月27日アクセス可）；邱立本：“朝鮮的誤判與背叛”，《邱立本的博客》，2013年4月11日：<http://blog.ifeng.com/article/25639343.html>（2014年9月26日アクセス可）。

70) 呂超：“中国确立东北亚去安全环境的战略选择”，《世界经济与政治》，第7期，2008年，第21页。

71) Deng Yuwen, “Beijing Should Abandon Wayward North Korea,” *Financial Times Asia* (February 28, 2013).

72) 「北朝鮮、中国が決定的瞬間に自分たちを捨てると考えている(1)」『中央日報』(2013年5月20日)：<http://japanese.joins.com/article/796/171796.html>（2013年5月21日アクセス可）。

いとしている⁷³⁾。

また、中国国内には、対中封じ込めを戦略的な目標とする米国が、北朝鮮に対中包囲網の一翼を担わせようとしているという見解が存在すると指摘されている⁷⁴⁾。

中国国際問題研究所の北朝鮮の専門家でもあり、中国の対北朝鮮政策にも影響力があった陶炳蔚は、1996年、当時の米国と北朝鮮との間での急速な関係改善に懸念を示した。陶は、米国が北朝鮮に接近しているのは、同国が長期的な目標としている朝鮮半島における中国の影響力を阻害するための第一歩であり、米国は北朝鮮を対中封じ込めのために利用すべきではないと警告を発している⁷⁵⁾。陶と同様の意見は、近年になっても見られる⁷⁶⁾。

中国には、インドやパキスタン、イスラエルに対して行ったのと同じように、米国が北朝鮮の核保有を容認することもありうるという議論がある⁷⁷⁾。沈丁立は、インドと同様、北朝鮮も対中封じ込めのために役立つパートナーであると米国が考えるようになれば、同国が北朝鮮の核兵器保有を受け入れて、北朝鮮と正式な国交を結ぶこともありうることを示唆している⁷⁸⁾。

北朝鮮の「第二のヴェトナム」化への懸念は、中国の専門家のみならず、政策決定者レベルでも共有されている。例えば、『ニューヨーク・タイムズ』は、中国の複数の高官が、金正日は核兵器を米国のみならず、中国を脅すための外

73) Zhang, "Coping with a Nuclear North Korea," *China Security*, p. 16.

74) Fei-Ling Wang, "Looking East: China's Policy toward the Korean Peninsula," in Sung Chull Kim and David C. Kang (eds.), *Engagement with North Korea: A Viable Alternative* (Albany: State University of New York, 2009), p. 66; 王俊生:《朝核问题与中国角色: 多远背景下的共同管理》, 世界知识出版社, 2012年, 第52页。

75) Harrison, *Korean Endgame: A Strategy for Reunification and U. S. Disengagement*, pp. 324-325.

76) 任卫东:“朝美关系是半岛问题的要害”,《瞭望》, 总第1322期, 2009年, 第58页; 戴旭:《C形包围: 内忧外患下的中国突围》, 文汇出版社, 2009年, 第21-22页; 任卫东:“朝美关系可能突然缓和”,《环球网》, 2013年2月19日: http://opinion.huanqiu.com/opinion_world/2013-02/3652600.html (2013年2月22日アクセス可)。

77) 李虎男「中国の東アジア政策と朝鮮半島」『立命館国際地域研究』第35号(2012年), 52項:“解码朝鲜核试这一年”,《新华网》, 2007年10月11日: http://news.xinhuanet.com/herald/2007-10/11/content_6862693.htm (2013年8月7日アクセス可); 金祥波:《朝鲜对外战略史研究》, 中国社会科学出版社, 2012年, 第188页。

78) Dingli Shen, "Cooperative Denuclearization toward North Korea," *The Washington Quarterly*, Vo. 32, No. 4 (2009), pp. 184-185.

交上のカードと見なしていると発言していたと報道している⁷⁹⁾。

韓国の金大中元大統領自身が述べるところによれば、2000年6月の平壤での史上初の南北首脳会談において、南北朝鮮の統一後も、北東アジア地域の安定のために朝鮮半島に米軍のプレゼンスは残さなければならないと金大中が金正日に対して発言すると、金正日は、「(朝鮮)半島は大国によって囲まれており、もし米国の軍事的なプレゼンスが引くようなことがあれば、これらの大国が覇権争いのために入り込むような巨大な真空空間ができるであろう」と返答した。金正日は続けて、「そうである、我々は、ロシア、中国、日本といった大国に囲まれており、それゆえ、米国の兵力が引き続き留まることが望まれる」とも付け加えた⁸⁰⁾。

中国政府側は、この金正日の発言を自国に対する不信感の表明であるとして不快感を抱き、北朝鮮は米国を対中牽制のために使おうとしていると受け止めた⁸¹⁾。

2000年10月、当時の中国の遲浩田国防部長と米国のマドレーン・オルブライト国務長官が訪朝する。この両者による訪朝は日程的に重複している。10月22日に遅国防部長が北朝鮮を訪れ、翌日の23日には北朝鮮の金鎰喆人民武力相と会談する。そして、遅は、オルブライトと金正日の会談が終わった後の25日に金正日との会談を行う。一方のオルブライトは、23日に訪朝して金正日と会談を行っている。中国外交部の朱邦造報道官は、オルブライト訪朝を肯定的に評価する一方、遅国防部長の訪朝とオルブライト国務長官の訪朝との間に関連性はないとコメントしている⁸²⁾。

79) Joseph Kahn, "The North Korean Challenge: China May Press North Koreans," *The New York Times* (October 20, 2006): <http://query.nytimes.com/gst/fullpage.html?res=9900E1DD163FF933A15753C1A9609C8B63&pagewanted=all> (2012年4月16日アクセス可)。

80) Doug Struck, "South Korean Says North Wants U.S. Troops to Stay: Summit Declaration Called 'a Great Relief': [Final Edition]," *The Washington Post* (August 30, 2000)。

81) 船橋洋一『ザ・ペニンシュラ・クエスチョン：朝鮮半島第二次核危機』（朝日新聞社、2006年）、495-496項。

82) 坂東賢治「オルブライト米国務長官・金正日総書記会談 難問決着先送り 米大統領訪朝で打開へ」『毎日新聞』（2000年10月25日、朝刊）。

しかし、2000年10月は、朝鮮戦争に中国の人民志願軍が参戦してから50周年という節目であり、遅国防部長による訪朝は以前から計画されていたが、オルブライト訪朝に触発されたため、中国側も急速代表団を平壤に送ることになったと思われる⁸³⁾。

米国のオルブライト国務長官による訪朝という、米朝関係が進展しているタイミングで中国が訪朝団を派遣した理由は、高まる米国の北朝鮮への影響力を相殺するためであった。朝鮮半島情勢における中国の役割は米国との関係と強く結びついており、中国のリアルポリティック的な観点からすると、この時の米朝関係の進展を警戒せざるを得なかったのである⁸⁴⁾。

2007年6月、米国の六者会合の首席代表であったクリストファー・ヒル国務次官補が突如訪朝した際、中国の専門家達は、米朝関係が急速に改善して米国の朝鮮半島における影響力が拡大し、北朝鮮が米国による対中包囲網の最前線と化すのを憂慮していた⁸⁵⁾。米朝が急速に接近していたこの時期、中国の最高指導部は両国関係の変化に驚愕したため、中国社会科学院などの研究機関に対して、米朝関係をめぐる情勢を分析するように指示したという⁸⁶⁾。この頃の米朝関係の改善の速度は、中国にとっても予想を超えたものであった。

訪朝の後、ヒルは六者会合の議長国である中国に立ち寄らずに日韓に向かうなど、中国の米国に対する不信任が増していた。中国は、米朝が自国の意向を汲まずに六者会合の日程を決めようとしていることに対して不満を抱くようになる。そのため、4月に中国外交部長に就任してから一度も訪朝していなかった楊潔篪を7月2日に北朝鮮に送ることとなる⁸⁷⁾。この場による訪朝は、中国

83) Elisabeth Rosenthal, "Chinese Official Beats Albright to North Korea," *The New York Times* (October 23, 2000).

84) Samuel S. Kim and Tai Hwan Lee, "Chinese-North Korean Relations: Managing Asymmetrical Interdependence," in Samuel S. Kim and Tai Hwan Lee (eds.), *North Korea and Northeast Asia* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, INC., 2002), p. 115.

85) Snyder, *China's Rise and the Two Koreas: Politics, Economics, Security*, p. 146.

86) 江迅: "美朝伝密謀建交中韩应变", 《多维新闻》, 2007年5月19日: <http://politics.dwnnews.com/news/2007-05-19/2947380.html> (2014年1月29日アクセス可)。

87) 佐伯聡士「6か国協議 中国、主導権回復狙う 米朝急接近に不快感」『読売新聞』(2007年7月21日、朝刊)。

側がこの当時の米朝関係の進展に対する警戒心を強めていたためになされた対抗措置であろう⁸⁸⁾。この時期の中国は、米朝接近に対する懸念を特に強めていたのである⁸⁹⁾。10月の二度目となる朝鮮半島での南北首脳会談の時期、中国の国際問題の専門家の間では、米国が対中包囲網構築のために北朝鮮に接近しているという意見が聞かれるようになり、米朝関係の進展を警戒する見方も出ていた⁹⁰⁾。

2010年5月3日から8日にかけて、金正日が約4年ぶりに中国を訪れる。同年3月に北朝鮮が韓国の哨戒艦を攻撃し、沈没させたとされる事件が起き、朝鮮半島情勢が緊迫化していたタイミングで中国側が金正日の訪中を受け入れた動機の一つは、朝鮮半島の緊張緩和のためであった。しかし、そのみならず、中国は北朝鮮に再接近することによって、同国に対する影響力を回復させるという動機を抱いていたのである。2006年10月の北朝鮮による初の核実験以降、米国と北朝鮮との間での直接協議の結果が六者会合の議題を規定するようになり、議長国である中国及び六者会合の存在感が薄まっていく。米朝が中国や六者会合を介さずに交渉を進め、両国関係も改善したこともあって、中国の北朝鮮に対する影響力も低下していた。韓国哨戒艦沈没事件によって米朝関係が悪化し始めていたこともあって、米国の北朝鮮及び朝鮮半島全体への影響力を削ぐ機会が訪れたため、中国は金正日による訪中を受け入れたと言える⁹¹⁾。

米国による対中包囲網の形成を防止するという中国の周辺外交の目的は、「特殊な周辺国家」である北朝鮮との関係においても完全に成し遂げられているわ

88) 池田元博「金総書記、核初期措置履行明言、中国のメンツ立てる」『日本経済新聞』(2007年7月4日、朝刊)。

89) その点は、拙稿『米中間の「戦略的不信」と中国の北朝鮮への影響力の限界：中国の米国による対中封じ込めへの懸念と中朝関係』(青山学院大学大学院国際政治経済学研究科修士論文、2014年)、第4章。

90) 伊集院敦「「盟友」中国の我慢と焦り(地球回覧)」『日本経済新聞』(2007年10月18日、朝刊)。

91) Kang Choi, "Chairman Kim Jong Il's Visit to China and Its Implications," 38 *North* (May 21, 2010): <http://38north.org/2010/05/chairman-kim-jong-il%e2%80%99s-visit-to-china-and-its-implications/> (2014年1月7日アクセス可)。

けではない。中国は、北朝鮮の米国への歩み寄りや、米国による北朝鮮の抱き込みというシナリオを現実味のあるものと考えてきた。中国は、北朝鮮のような伝統的な友好国でさえも、自国から離れて米国に接近していくかもしれないという外交的な不安を抱えているのである。

結論

本稿は、従来の中朝関係に関する議論では、ほとんど論じられていない二つの事柄を取り上げた。一つは、中国が北朝鮮を周辺外交においてどのように位置づけているのかという点であり、もう一つは中国が米朝接近を不安視してきたということである。

これまで論じてきたように、中国は北朝鮮との関係を他の周辺国との関係とは差別化してきた。中国が北朝鮮との関係を周辺外交の対象外としてきた理由は、中国にとって、地政学的な観点から容易には放棄することができない重要な隣国である北朝鮮との関係が未だに特殊なものだからなのである。

だが、中国は周辺外交の対象国ではない北朝鮮との関係においても、周辺外交の主目的である米国による対中包囲網の拡大阻止を意識してきた。中国には、自国の頭越しでの米朝接近というシナリオに対する不安があり、米国と正式な外交関係を持っていない北朝鮮が「第二のヴェトナム」となって、米国陣営に加わることもありうるという危機感がある。更に、対中封じ込め政策のため、米国が北朝鮮を対中包囲網に誘い込むこともありうる中国は認識している。

中朝間では、両国の関係が「唇齒の相互依存」や「鮮血で固められた伝統的友誼」などといったレトリックによって喧伝され、その紐帯が強調されてきた。しかし、冷戦期から現在にかけての中朝関係を見ると、両国間での相互不信には根本的な要素が存在している。それは、中朝のどちらも、相手が自己の利益を最優先にして、自国にとって好ましくない、あるいは自国と対立状態にすらある第三国と秘密裡に結託するのではないかという猜疑心である。

世界政府が存在しない無政府状態の国際システムにおいて、国家は、今日の友好国が明日には敵国になるかもしれないという「システムの脅威 (the sys-

temic threat)⁹²⁾」に晒されている。冷戦後の中朝関係は、まさにそのような「システム的な脅威」の下にある国家間関係の典型であり、中朝は共に、相手が自国との関係を捨てて、米国と手を組むのではないかという疑念を抱いてきた。

2014年に入ってから、中国では、自国の利益を損ねる隣国の「負の遺産」である北朝鮮を見捨てるべきであるという意見が出てきている⁹³⁾。だが、米中関係における不確実性が増す現状において、中国から見た北朝鮮の地政学的な価値は向上しており、中国としては北朝鮮を敵方に追いやるような政策をとる余裕はなかろう⁹⁴⁾。そのため、北朝鮮が自国の利益を損ねるように振る舞ったとしても、中国が北朝鮮との関係を断絶させるような政策を採用することはできないのである。

92) Klaus Knorr, "Threat Perception," in Klaus Knorr (ed.), *Historical Dimensions of National Security Problems* (Lawrence: The University Press of Kansas, 1976), pp. 79–80.

93) 杨俊锋: "中国应放弃'负资产'朝鲜", 《金融时报: 中文网》, 2014年7月7日: <http://m.ftchinese.com/story/001057090> (2014年7月10日アクセス可)。

94) Jae Ho Chung and Myung-Hae Choi, "Uncertain Allies or Uncomfortable Neighbors? Making Sense of China-North Korea Relations, 1949–2010," *The Pacific Review*, Vol. 26, No. 3 (2013), p. 258.